

鼻高面装束道具類の新調及び修繕

①鼻高面の御面(修繕)



延宝八年(1680)吉田城主小笠原壱岐守奉納と伝わり、全体は朱漆で仕上げられている。眉と髭は墨書き、高い鼻は中央でやや下に折れ、目は銅板を付けている。現在は人が被るのではなく、写真の通り人の手に持たれた状態で、頼朝行列の際は神輿の前を進む。

この面を顔にあててもらうと夏病みしないとの信仰がある。所々漆が剥落しており、その箇所のみを修繕する。全体塗り替えは行わず、古色仕上げを施し、もとの色との調和をはかる(眉や髭、髪はそのまま)。

寸法 縦20cm 横17cm

鼻高面は本来、道祖神もしくは猿田彦神(導きの神)の役割を担う役だったと考えられる。江戸時代の文献には、人が面を被り、上下緋の装束を着け、軍配団扇を両手で持ちながら神輿の前を歩く姿が描かれている。

記録によると明治まではその形態を維持しているが、大正頃に面を手で持つようになると共に、軍配団扇は他の物が代わりに持つようになったようである。いつからか面自体も付添の人が持つようになり、装束を着けた人(子供)が神輿の前を歩き、面と軍配団扇はそれぞれ別の人が持って歩いた。

昭和40年代にはその子供もいなくなり、「面を顔にあててもらうと夏病みしない」との信仰のみが残った。

※昭和40年代まで使用されていた装束のサイズや、当時の記憶が残る人の話から、鼻高面は子供が務めていたと推測される。神社祭礼誌などによると、江戸時代は吉田城主の前を通過する時のみ後ろ向きに歩いたとされ、吉田名蹤綜録などにもそのような姿が描かれている。

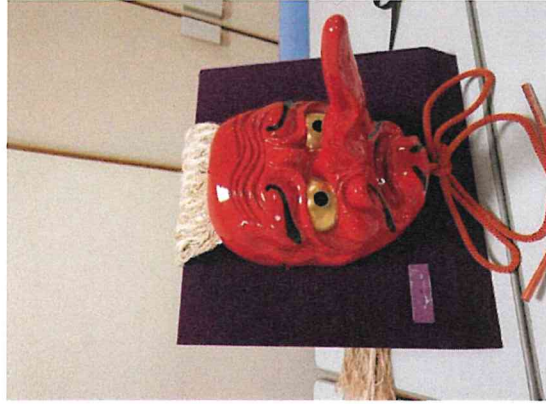


【吉田名蹤綜録】

この度の文化財指定にあわせ、面の修繕と複製の新調、装束道具類の修繕新調を行い、約100年ぶりに鼻高面本来の姿を再現する。

鼻高面修繕 豊橋市魚町 榎田辺佛具店

②鼻高面の御面（複製新調） 奉納品



吉田神社のお神輿は、昭和40年代まで魚町が担ぎ手を担いその勇壮な姿から「暴れ神輿」と呼ばれました。

初代のお神輿は魚町発展の基礎を築いた今川義元公の寄進であり、その御恩に報いる為です。

同様に神輿の前を進む「鼻高面」も魚町の子供が担いでいましたが、魚町が神輿を担がなくなると同時に子供もいなくなり、面を持った介添えだけが残りました。

当社では予てより、鼻高面本来の姿の復活を模索しており、昨年魚町へご相談させて頂きました。

魚町の安海熊野社は、吉田藩主大河内家が所有していた室町時代に遡る能面や狂言面、装束等と多数所蔵し、

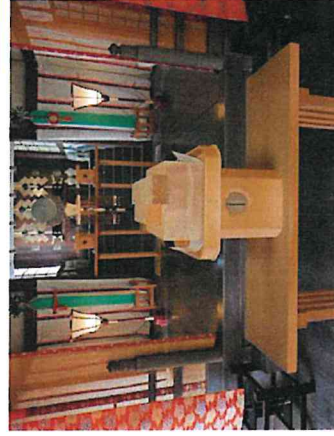
奉納された「二代目鼻高面」

魚町能楽保存会は、それらの保存管理を行っています。この度、魚町自治会長の高坂さんに能面作家をご紹介頂き、文化財指定に合わせ、「二代目鼻高面」を製作、ご奉納頂きました。



「二代目鼻高面」をご奉納頂きましたのは、能面作家の

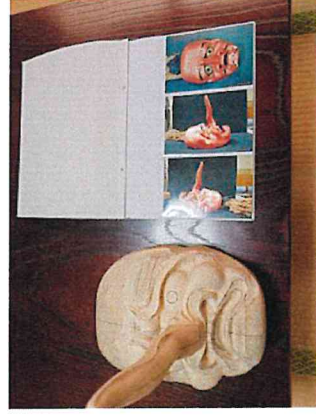
田中成治氏と原田ちよ子氏です。田中氏に面を、原田氏に髪毛を製作頂きました。



面材 日本檜の清祿



向って左が田中氏、右が原田氏



③鼻高面の装束(修繕及び新調)



明治から大正頃に作られたと推測される鼻高面の狩衣。前記したように、鼻高面役の子供は昭和40年代頃までは、この狩衣(緋色)と緋袴を着けていたようである。半世紀以上、使用されずに保管されていた為、変色や破れなどもみられる。修理を検討したが、洗いなどに生地が堪えられず、継続的な使用は困難との指摘を受け、丈もかなり短いことから新調する。



生地については全く同じものは費用的にも難しく、現在、広く神社の調度品などに用いられる新大和錦を採用し、色は緋色を継承して新調する。



明治から大正頃に作られたと推測される鼻高面の緋袴。前記したように、鼻高面役の子供は昭和40年代頃までは、この袴と緋の狩衣を着けていたようである。半世紀以上、使用されずに保管されていた為、変色や破れなどもみられる。新調も検討したが、狩衣に比べるとまだ状態が良く、生地も正絹で模様などもある為、修理して使用する事を選択した。汗やカビなどによる変色が見られる為、生地の補正、裂けている部分の修復を行う。

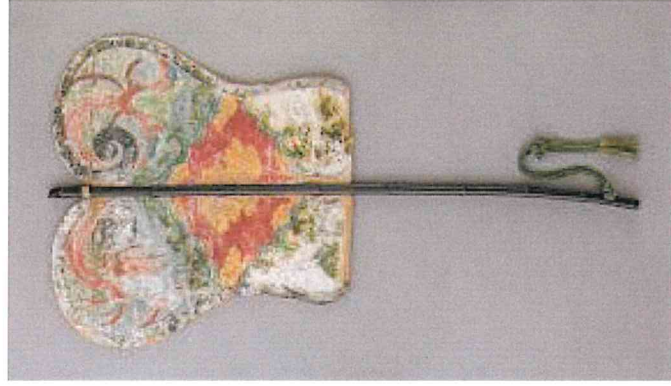


生地見本:新大和錦

緋袴修繕 豊橋市南栄町 ㈱山正山崎

令和8年は、古式に則り魚町のお子さんに鼻高面をお勤め頂きます。鼻高面役の子供は魚町の小学3年生牧大悟さんに決定致しました。介添はこれまで同様魚町魚伊の山本さんにご奉仕頂きます。新調した鼻高面複製を被りますが、境内のみとし、以後はこれまで同様介添が面を持ち歩きます。「面を顔にあててもらおうと夏病みしない」という信仰はここ数十年で定着しており、これは今後も継続致します。

④鼻高面の軍配団扇（新調）

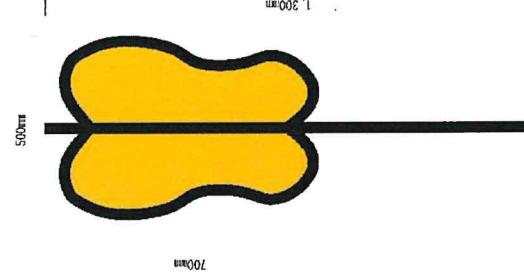


棒長さ145cm 幅75cm



軍配団扇は元々鼻高面の持ち物であるが、前記した通り大正頃には鼻高面役から離れ、威儀物の一つとして現在は威儀物奉持者1人が携帯して歩く。
現在の軍配団扇は明治から大正にかけて造られたものだと推測され、経年劣化により描かれている鳳凰や桐も破れて確認しづらくなっている。
板に紙を貼ったもので修理も難しく、この絵柄を再現して新調するのは費用面からみても困難である。
このような理由から江戸時代の祭礼図に描かれているような黄金色とし、サイズも子供が持つには大きすぎる為、一回り小さくして新調する。

軍配団扇新調 あま市七宝町 神具(株)美津濃



新調イメージ

棒長さ130cm 幅50cm